

哲学する本棚 「戦争・平和と哲学」ブックリスト

なぜ戦争するのか？

戦争よりも平和がいい。それなのに、どうして戦争をするのだろうか？

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | やくそくぼくらはぜったい戦争しない
作/那須正幹 絵/武田美穂
ポプラ社 | 「おばあちゃん」とその死んだ「にいちゃん」、そして「ぼく」との身近なふれあいから、過去の戦争へと想像力が向かう物語。戦争と平和というむずかしい問題を、どう考えたらよいだろうか。 |
| 2 | もっとおおきなたいほうを
二見正直
福音館書店 | キツネと王様との「戦争」を描いた絵本。王様からしかけた争いだが、なぜかキツネにかなわない。だんだんエスカレートしていく様がユーモラスに描かれる。見栄っぱりな王様の行方やいかに。 |
| 3 | ヒトはなぜ戦争をするのか？
—アインシュタインとフロイトの往復書簡
著/アルバート・アインシュタイン、ジグムント・フロイト
編訳/浅見昇吾
花風社 | ナチズムが権力を握る中、天才物理学者が天才心理学者に手紙を送った。「ヒトはなぜ戦争をするのか？」心理学者はこう返した。「ヒトはなぜ戦争に反対するのか？」 |
| 4 | 人はなぜ戦うのか
松木武彦
講談社 | 「戦いの思考」は稲作とともに日本列島にやってきた。「倭人」はなぜ短剣を選んだのか？朝鮮半島に出兵したのはどうしてか？考古学から考える。 |
| 5 | 戦争の思想史—哲学者は戦うことをどう考えてきたのか
中山元
平凡社 | 古代ローマでの反乱から、イスラエルとパレスチナの戦争まで、哲学者たちは戦争を分析し、利用し、批判してきた。戦争の思想史は、ほとんど人類の歴史そのものだ。 |
| 6 | 戦場の哲学者—戦争ではなぜ平気で人が殺せるのか
著/J・グレン・グレイ 監訳/吉田一彦
訳/谷さつき
PHP研究所 | 勝てるなら戦争をしてもいいのか？第二次世界大戦で従軍したアメリカ人哲学者が、戦中の生、死、罪の意識を記録する。 |
| 7 | 戦争は人間的な営みである—戦争文化試論
石川明人
並木書房 | 戦争は悪だというけれど、武器は美しいし、戦闘はかっこよく見える。今の暮らしと文化の中に、戦争が入り込んでいるのだとしたら、そのことに気づいておくことが大切だ。 |
| 8 | 戦争の記憶
著/イアン・ブルマ 訳/石井信平
筑摩書房 | ユダヤ人への罪責感から逃れられないドイツ、犠牲者を悼むけれども加害については沈黙する日本。それぞれの国に残る戦争の記憶を、オランダ生まれの著者が記録する。 |
| 9 | モモ
著/ミヒヤエル・エンデ 訳/大島かおり
岩波書店 | あらいごとはどうして始まるか、といえば、エンデの出した答えの一つは、時間が奪われたから、ということになるであろうか。 |

哲学者の考える平和とは？

哲学者は戦争や平和についてかんがえてきたが、それはどのような思索だったのか？

- | | | |
|----|---|---|
| 10 | 永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3編
著/カント 訳/中山元
光文社 | 哲学者による平和論としては、この書物はずすことはできない。西田幾多郎の同僚朝永三十郎が日本にいち早く紹介したことでも知られている。今日では「平和とはいかにして可能か」について、カントの議論を基礎にできるか否かも問われている。 |
| 11 | へいわとせんそう
文/たにかわしゅんたろう 絵/Noritake
ブロンズ新社 | 谷川俊太郎の父は、西田幾多郎の教え子の徹三で、俊太郎の文や考えは、どこか哲学の香りがある。左右のページを対比させて戦争と平和を考えるあり方は、まさに哲学そのもの。 |
| 12 | 宗教的経験の諸相 上下
著/W ジェイムズ 訳/辨田 啓三郎
岩波書店 | 平和に不可欠な個々人の心の平穩。この一見簡単なことが、なかなかできない。ジェイムズはこの本に収められた講義のなかで、この問題に挑んだとも言える。幾多郎、大拙の愛したこの書には、戦争についての記述もあり、とても興味深いものとなっている。 |
| 13 | ベルクソン全集6巻 『道徳と宗教の二源泉』
著 アンリ・ベルクソン 訳/中村雄二郎
白水社 | 第二次世界大戦のさなかに、失意のなかで亡くなった哲学者ベルクソンの最後の書物。文明のうねりのなかで、心の拠り所をどこに求めるべきかを問うている。 |

哲学者の考える平和とは？

哲学者は戦争や平和についてかんがえてきたが、それはどのような思索だったのか？

- | | | |
|--------------|-----------------------|---|
| 14 国家 上下 | 著／プラトン 訳／藤沢令夫
岩波書店 | ソクラテスは勇敢な戦士として戦地をめぐりぬけたことで有名である。そのソクラテスが、いわば西洋文化の誕生の地ギリシアで戦争をどのように見ていたかが記録されている。 |
| 15 歴史哲学 上下 | 著／ヘーゲル 訳／長谷川宏
岩波書店 | 戦争とは何かについて考えることは、歴史とは何かについて考えることでもある。ヘーゲルはナポレオンがヨーロッパを席卷し没落していく様を見届け、何を考えたのか。 |
| 16 神学・政治論 上下 | 著／スピノザ 訳／畠中尚志
岩波書店 | 『エチカ』で知られるスピノザの生前に公刊された唯一の書物。「言論の自由」を訴えた本書は、いままさにある種の切迫感をもって考えさせるものをもっている。 |
| 17 自由からの逃走 | 著／E.フロム 訳／日高六郎
創元社 | 鈴木大拙とも友人であったフロムの代表作のひとつ。20世紀前半の世界大戦においてあらわになった人間の特質を精査し、人間が求めているのは、自由ではなく、自由を回避したある種の隷従である、と分析している。 |
| 18 カントの平和論 | 朝永三十郎
改造社 | 西田幾多郎の京都帝国大学での同僚であった著者による、1922年刊の平和についての「哲学的考察」。カント論でありながら、著者の時事批判が垣間見られ、今日でも多くを汲み取ることができる。 |
| 19 ルソー全集 第四巻 | 著／ルソー 訳／山路昭他
白水社 | ルソーといえば、『社会契約論』や『エミール』が有名であるが、戦争論もいくつか書き残している。戦争は国家の間でなされる、とすでにルソーが書いたとき、個人の運命についてどう考えていたのであろうか。 |

平和はつくれるか？

平和は目に見えず、手でつかめない。空気のような平和をつくることはできるのか？

- | | | |
|---|---|--|
| 20 なんでもおんなじ？ ふたりはともだち | 作／コリンヌ・アヴェリス
絵／スーザン・パーレイ 訳／前田まゆみ
フレーベル館 | りすのソレルとともだちのセージは、なにからなにまでおなじ。しかし、おとまりをきっかけに、ふたりのちがいが明らかに。ともだちどうしても、ささいなちがいが驚いた、そんな経験はないだろうか。これが国と国であつたら、と想像が膨らむ。 |
| 21 ゴリラからの警告―「人間社会、ここがおかしい」 | 山極寿一
毎日新聞出版 | 「ゴリラの国」への留学から帰ってきたら、人間社会はとつても変だった―ゴリラとは別の進化の道を選んだのだから、人間には人間の平和のつくり方があるはず。 |
| 22 戦争をやめさせ環境破壊をくいとめる新しい社会のつくり方―エコとピースのオルタナティブ | 田中優
合同出版 | 戦争の原因は「エネ」「カネ」「軍需」だ！ そうすると、省エネ製品を買うことも、貯金の仕方を考えることも、平和をつくることに関係がある。 |
| 23 広島で、これまでにないかたちで「平和」を考える | 草間さゆり、寺田敏郎、松川絵里、Flavia Baldari
ひろしま哲学カフェ | 平和は争いがないこと？ 「けんかするほど仲がいい」ってことはある？ 哲学カフェは、平和を考えるタネをまく。 |
| 24 哲学のおやつ 10代からの考えるレッスン 戦争と平和 | 著／ブリジット・ラベ、ミシェル・ピュエシュ
訳／西川葉澄
汐文社 | 平和は農業のようなもの。手入れをしなければ、育たない。お話とイラストから、平和のつくり方を考える。 |
| 25 百年の愚行 | Think the Earthプロジェクト
紀伊國屋書店 | この100年で、科学技術は進歩し、産業は発達し、地球の人口は大きく増加した。けれども、環境は汚染され、ある人々は差別され、病気にかかり、命を奪われている。人類の課題を示す写真集。 |
| 26 戦争する国、平和する国―ノーベル平和賞受賞者 現コスタリカ大統領 オスカル・アリアス・サンチェス氏と語る | 小出五郎
佼成出版社 | 中米のコスタリカは、非武装中立の国。戦争しないだけでなく、「平和する」とはどういうことか。ウミガメツアーも子どもの投票権も、関係がある。 |
| 27 わすれられないおくりもの | 作・絵／スーザン・パーレイ 訳／小川仁央
評論社 | 戦争で真っ先に奪われるもののひとつに、死に逝くひとが後悔のないように周りのひととふれあうことであり、残されたひとが亡くなったひとをゆっくりと送りだすことだとすればどうだろうか。 |

戦争の中、戦争の後

戦闘だけが戦争ではない。戦争はいつ始まり、いつ終わったと言えるのか？

- | | | |
|----|-------------------------------------|--|
| 28 | ケストナーの戦争日記1941-1945 | 作家・ケストナーは、独裁政権下でもドイツにとどまった。真偽のわからない噂、皮肉のこもったジョーク、悪化していく戦況。日本の戦争日記と比べてみると興味深い。 |
| | 著／エーリヒ・ケストナー
編／スヴェン・ハヌシエク 訳／酒寄進一 | 岩波書店 |
| 29 | 新版 きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記 | 今よりはるかにエリートだった大学生たちも、戦地に送り出された。新兵いじめに遭い、戦いや飢えや病のために生死をさまよひ、学問を奪われた短い人生のうちで、彼らは何を書き遺したか。 |
| | 編／日本戦没学生記念会 | 岩波書店 |
| 30 | ヒトラーと哲学者—哲学はナチズムとどう関わったか | 独裁者・ヒトラーは哲学書を読み、自分に同調する哲学者を優遇した。その一方で、ユダヤ人哲学者を追放し、反対する哲学者を処刑した。哲学者も戦争と無関係ではありえない。 |
| | 著／イヴォンヌ・シエラット
訳／三ツ木道夫、大久保友博 | 白水社 |
| 31 | イェルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告 | 一九六一年春、一人の男がイスラエルの法廷に立った。第二次世界大戦中、ナチスによるユダヤ人虐殺の手続きをしたというアイヒマンだ。絞切型を繰り返す彼に、戦争犯罪の責任は問えるのか？ |
| | 著／ハンナ・アーレント 訳／大久保和郎 | みすず書房 |
| 32 | 戦争を記憶する—広島・ホロコーストと現在 | 日本にとっては許しがたい原爆が、アメリカにとっては正義の実現として記憶されている。戦争の記憶は、国家がつくり出したものなのか？ |
| | 藤原帰一 | 講談社 |
| 33 | わたしが子どものころ戦争があった | 児童文学者8人(三木卓、角野栄子他)へのインタビュー集。こどもの目線からのあの戦争の記憶、1945年以降も「戦争はずっと続いている」という証言は、読む者に訴えかける。 |
| | 編／野上暁 | 理論社 |
| 34 | 疎開した四〇万冊の図書 | 衣食にも困る戦時中に、図書館の本を守る余裕はあるのか？当時の日比谷図書館長は中田邦造。西田幾多郎の弟子で、石川県立図書館長だったこともある。 |
| | 金高謙二 | 幻戯書房 |

異文化同士が接触するとき

言葉も食べ物も何もかも違う国どうしが出会うとき、お互いを理解するには、何が必要だろうか？

- | | | |
|----|------------------------|---|
| 35 | 新編 日本の面影 | ハーンは最初から日本を理解できたわけではなく、その友人のなかには最後まで理解できなかった者もいた。ハーンは、日本人の見栄、外国人のストレートな言動などのささいなことから、争いが起こるのを記録している。ハーンの観察のうちに、互いの理解の何らかの糸口があるだろうか。 |
| | 著／ラフカディオ・ハーン 訳／池田雅之 | 角川書店 |
| 36 | せかいでいちばんつよい国 | 「大きな国」がひとびとの「しあわせ」を考えてほかの国を「せいふく」していく——このどこかで聞いた恐ろしい台詞が、いつのまにかかき消されて、平和で「小さな国」の歌がみんなを包み込む。 |
| | 作／デビッド マッキー 訳／なががわちひろ | 光村教育図書 |
| 37 | おひさまとおつきさまのけんか | 戦争とけんかに共通するのは、きっかけがささいなこと、という点ではないか。「めがねうさぎ」「おぼけ」シリーズで知られる、せなけいこによる名作絵本。「まさか」こんなこと？！ |
| | せなけいこ | ポプラ社 |
| 38 | ベルツの日記 | 日本にドイツ近代医学をもたらしたベルツの滞日の記録。日本人の表の顔から、その奥にのぞかせる不思議な心情にいたるまで、今日の目からみると、鏡を見せられているような感覚が。異文化を理解して、それと手をつなぐことはできるのか。 |
| | 著／トク・ベルツ 訳／菅沼竜太郎 | 岩波書店 |
| 39 | 茨木のり子詩集 現代詩文庫20 | 代表作「わたしが一番きれいだったとき」を含む初期のアンソロジー。他人のなにげない言葉を対話のように詩のなかに埋め込み、哲学のように生きる知恵を求めた詩人とともに、戦争と平和をどう捉えるか。 |
| | 河上徹太郎他 | 思潮社 |
| 40 | 近代の超克 | 西田の弟子の西谷啓治、下村寅太郎らが出席した有名な座国の談会「近代の超克」。西洋の物質文明、日本の精神主義的傾向など、議論されている内容から論者のキャラクターと学識にいたるまで、様々な意味で考えさせられる。 |
| | 河上徹太郎他 | 富山房 |
| 41 | 大君の都 上中下 | 日本人の外国人に対する意識は独特である。明治維新の時期の日本人の意識についての記録は、よく読むと、過去のものとは言い切れないものが多い。オールコックの思索のなかには、形而上学的にみた日本人論といった趣がみられる。 |
| | 著／ラザフォード・オールコック 訳／山口光朔 | 岩波書店 |
| 42 | 一外交官の見た明治維新 上下 | 外国人からみた日本人の二面性が記録されている。外国との折衝にあたる日本人の裏表と考え方は、戦争に対する日本人の姿勢と重なるように思えてくる。 |
| | 著／アーネスト・サトウ 訳／坂田精一 | 岩波書店 |

京都学派と「あの戦争」

「京都学派」の哲学は、第二次世界大戦時に思想的に関与したと言われている。彼らは何を考え、何を指したのか。

43 人間・西田幾多郎—未完の哲学	西田は日本が三度の戦争をした時代を経験した。三度目の戦争のときには、弟子も含め、戦争について思想的に関与したと言われるが、西田自身の実際はどうであったか。
藤田正勝	岩波書店
44 物語「京都学派」	京都帝国大学に招かれた西田幾多郎とその同僚、弟子たちのネットワークが「京都学派」と称されている。かれらの多くは留学し異文化を見聞しているが、その際に何を考えていたのかを本展示の目でみるとまたひと味違うかも。
竹田篤司	中央公論新社
45 京都学派と日本海軍—新史料「大島メモ」をめぐる	戦時中、日本海軍の一部が、京都学派の哲学者たちを集めて政治的な議論をさせていた。彼らの努力は「戦争協力」だったのか、「戦争批判」だったのか？
大橋良介	PHP研究所
46 入門近代日本思想史	明治維新から戦後までの日本の哲学史としては、コンパクトながら、よくまとまっている。積極的に異文化を取り入れていく過程で、戦争(二つの世界大戦)を経験し、その後どうなったかにいたるまで簡便に提示している。
濱田恂子	筑摩書房
47 鎖国	第二次世界大戦後に、和辻が敗戦についての反省として記した書物。鎖国がその後の日本にとってどのような意味を持つかについて、論じている。これもまた、哲学者による戦争・平和論として読むことができるだろう。
和辻哲郎	岩波書店
48 日本哲学史	著者は、日本の哲学史について語る際に、世界大戦が大きな位置をしめることを、あらためて確認している。戦後の日本思想の傾向と戦前のそれを比較すると、とても興味深い。
藤田正勝	昭和堂
49 哲学論文集 第七	西田の最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」は、世界大戦の終結する三ヶ月前に書き終えられた。西田は戦争を意識しながら、どのような思索を展開したのか。
西田幾多郎	岩波書店
50 敵味方をこえて平和を織る—久松真一と遠藤虚籟に学ぶ「現代日本」の忘れもの	戦争の犠牲者のために曼荼羅を織り続けた遠藤虚籟と、「茶禅一味」を生きた久松真一。戦中と戦後を一貫する二人の生き方から、平和の織り方を学ぶ。
和田修二、倉澤行洋	燈影舎
51 戸坂潤全集 第二巻	西田がその行方を三木清とともに気にかけていた、哲学者・唯物論者による『日本イデオロギー論』所収。すでに1930年代に日本の「精神主義」を批判し、文化の真のあり方について西洋文明への透徹した理解をもとに論陣を張っていたことの意味は、今日
戸坂潤	勁草書房
52 世界史の理論(京都哲学撰書;第11巻)	西田幾多郎の弟子たちが編んだ『世界史の理論』の復刻の他に、大島康正による戦後の論考「大東亜戦争と京都学派」を含む。京都学派の当時の戦争に対するスタンスを知るには必読の書。
著/西田幾多郎他 編/森哲郎	燈影舎

◆リストの本は、展示期間中は貸出できません。展示会終了後3月12日(木)より、貸出できます。

予約をご希望の方は哲学館受付カウンターにて【タイトル】もしくは【展示本番号】を伝えるか、

かほく市立中央図書館のサイトから予約してください。

※予約のためには、かほく市立図書館・石川県西田幾多郎記念哲学館図書館「利用券」が必要です。